

## 太平洋戦争と来日アメリカ宣教師

～シャーロット・B・デフォレストとマンザナー日系人収容所の場合～

石井紀子

“Let knowledge grow from more to more,  
And more of reverence in us dwell;  
That mind and soul, according well,  
May make one music.”

---Tennyson<sup>(1)</sup>

### はじめに

シャーロット・B・デフォレスト (Charlotte B. DeForest, 1879-1973, 神戸女学院第5代院長)<sup>(2)</sup> は、1940年1月、35年間務めた神戸女学院の院長の職を辞し、アメリカ合衆国への帰国の途についた。真珠湾攻撃によって日米間に太平洋戦争が勃発する2年近く前のことであった。

デフォレストは明治初期の1879年、来日アメリカ宣教師ジョン・ハイド・デフォレストの次女として大阪に生まれた。成人すると二世代目の宣教師として、自ら志願して日本の女子教育とキリスト教の伝道に尽力した。少女時代より還暦まで、アメリカで高校、大学時代を過ごした他は全て日本に在住した。そのためデフォレストは日本語と日本文化に精通し、戦前の日本社会と文化の深層を知る数少ないアメリカの知識人のひとりであった。こうした背景をもつデフォレストは戦争をはさんだ延べ7年余、アメリカ合衆国在住中に主に三つの仕事をした。まずアメリカに残る神戸女学院関係者や同志社関係者の安否と所在を確認し、これを支援し相互のネットワークづくりを推進した。次にカリフォルニアのマンザナー日系人収容所のジュニア・カウンセラーに志願し、1944年6月より収容所が閉鎖された1945年12月まで勤務した。最後にボストンの会衆派図書館 (Congregational Library) やハーバード大学図書館に所蔵されている、宣教師の書簡、報告書やアメリカン・ボードの議事録などを用いて英文で *The History of Kobe College* (『神戸女学院75年史』、1950年) を著した。

アメリカン・ボードの宣教師の中でも、デフォレストはとりわけ筆まめでペンが立つ宣教師として知られていた。その文章力は高校生エッセー・コンテストで優勝し、スミス・カレッジ在学中に学生新聞、*Smith College Monthly* の編集長を務め、歌詞コンテストで優勝し、卒業にあたってはクラスを代表してスピーチをするアイヴィー・オレーター (Ivy Orator) に選ばれたころから人目を引くようになった。<sup>(3)</sup> そのためデフォレストは生涯にわたって膨大

な書き物を残しているが、マンザナー日系人収容所に勤務した1年半余も例外ではない。ジュニア・カウンセラーの任務の一つとして、収容された日系人の聞き取り調査を行い、これを報告書にまとめた。「マンザナー日記抄録」(Manzanar Journal Entry)と題して、マンザナー収容所に滞在した1年半の間におよそ140通、計170頁余、シングル・スペースでびっしりタイプ打ちされた記録を残している。同時期に家族や友人に宛てた手紙や関連の文書も多数残されている。デフォレスト自身、この仕事を貴重な経験と捉え、報告書を書くたびにカーボン紙を用いて複数のコピーを作成し、家族や宣教師仲間など友人、そしてアメリカン・ボードに送った。終戦後20年を経て1965年、1966年には、この記録を元に体験談をエッセーにまとめ、雑誌*Pacific Citizen*に数回に渡って連載した。<sup>(4)</sup>

本稿では、「マンザナー日記抄録」と関連する書簡やアメリカン・ボードの報告書を用いて、第一節で1939年以降1944年にデフォレストがマンザナー日系人収容所に着任するまでの経緯を概観する。第二節では、日系人強制収容に対するキリスト教宗教団体による反対運動を概観し、これまで知られなかった来日宣教師とキリスト教宗教団体との接点を探る手がかりとしたい。第三節では「マンザナー日記抄録」の中で市民権(citizenship)と違憲問題を中心にデフォレストの果たした役割と思想を概観する。

## 1. マンザナー日系人収容所に着任するまでの経緯(1939年-1944年)

ここでは神戸女学院院長職にあったデフォレストが1940年に帰米し、太平洋戦争勃発後、マンザナー収容所にジュニア・カウンセラーとして着任するに至るまでの経緯を概観する。その際、日本語日本文化に精通する希少価値のアメリカ知識人としての本人の意思と選択に注目したい。

1939年10月、神戸女学院の社交館で同窓会主催のデフォレスト院長還暦祝賀会が開かれ、翌月には琵琶湖ホテルでアメリカン・ボードの日本伝道70周年記念集會が開かれた。この記念集會から戻ってまもなくデフォレストは執務中に倒れた。二つの祝賀行事をこなし過労になっていた上、悪化する日米関係に心を痛めていたからかもしれない。医師の勧めもあって、1940年1月、太平洋戦争が勃発する二年近く前に、デフォレストは病氣療養のために帰国した。このとき彼女は悪化する日米関係を予測していたのか、神戸女学院の院長職を畠中博に正式に譲った。畠中は神戸女学院の創設以来、初めての日本人院長となった。後年、その後日米両国が戦争状態に入ったことをふりかえって、デフォレストは自身の帰米がまさに「神の思し召し」であったと述べる。戦前に日本人教職員への正式な移管を完了していたことは女学院にとって効を成すものであった。神戸女学院はアメリカ資本とアメリカの人的資源とのつながりが極めて強かったにも関わらず、第二次世界大戦中、軍事化する国内にあって日本陸軍の警戒心をあおることもなく、無事安定した状態で存続した。

日本語の読み書きができるアメリカ人知識人は希少価値であったので、デフォレストには

1942年3月よりニューヨークの郵便局やワシントンD.C.の緊急管理部(Office for Emergency Management)で日本語力を生かす職の話が来ていた。デフォレストはいずれも表向き健康上の理由で断り、場合によっては代わりに他の候補者を推薦した。<sup>(5)</sup>

残された書簡によれば、デフォレストは1942年6月ごろマンザナー日系人収容所に関心を寄せ始めたと考えられる。<sup>(6)</sup> デフォレストは「会衆派による日系人収容者を支援する委員会」の総会に出席し、「人種」の部門に最も興味を持った。教会の方針通り、日系人の再定住地については将来を考えると全米に分散することが一番望ましいと考えていた。

デフォレストは1943年、ボストンよりカリフォルニア州のパサデナに移った。引退したアメリカン・ボードの宣教師の住処となっているピルグリム・プレース(Pilgrim Place)に入居し、近くのポモナ・カレッジ(Pomona College)で主に日系二世の兵隊たちに日本語を教える仕事に就いた。<sup>(7)</sup>

しかし、1943年6月、1944年1月と引き続きアメリカ政府の軍事、戦略部門から日本語力を有する人材を求める手紙が届いた。デフォレストはいずれの職にも就かなかった。前者は国防省(1944年現在War Department)アメリカ合衆国陸軍の通信隊の日本語学校(ヴァージニア州アーリントン)で主に日本語の漢字を教える仕事であり、後者はワシントンの連邦政府の戦略サービス部(Office of Strategic Services)の仕事で、捕えた日本兵より入手した日記や公式の文書のうち、特に草書で書かれたものを難なく読んで理解できる欧米人を求めている。その招聘の手紙にはデフォレストに対して政府が戦争遂行に成功するよう尽力することと、この文通の事実を口外しないように求める記述があった。<sup>(8)</sup> 先の郵便局の仕事も検閲課から来ていることを考えると、デフォレストは自分の日本語力と日本文化の知識をアメリカの諜報活動と戦争遂行の目的のために使う仕事は避けたと考えられる。

ポモナ・カレッジで教師の仕事に就いてから、デフォレストはマンザナーで何らかの仕事に就くことを強く希望し、周囲にその希望を伝えた。そんな折、旧友のマーガレット・ディルズ(Margaret D'Ills)夫人より日本語がわかる人材をカウンセラーとして求めていることを知った。ディルズ夫人(結婚前マーガレット・マシュー(Margaret Matthew))は、かつて日本YWCAの総幹事を1908-1918年までつとめた人でマンザナー収容所では福祉部の部長を務めていた。

デフォレストはマンザナーでの仕事について1944年3月31日、担当者宛に次の三つの希望を書き送った。

- ・一週間に48時間というフルタイム勤務は体力的にできない。半分の勤務体制で間に十分な休養をとれば相当の仕事ができる。四年前日本を発つ前に倒れてから、自分の限界の範囲内で効率的に仕事をする術を学んだ。
- ・子供相手に教える仕事はできない。訓練も経験もないので子供の教師としては不適格である。しかし、今の求人はその分野だけなのであろうか。

- ・自分ができるのは高齢者相手に日本語を使う仕事である。二世は日本の背景を強調されるのを嫌うと聞いているが本当か。昨日ツール・レーク収容所での通訳という立場に自分は推挙された。いずれにしろ半分の勤務体制でしか働くことはできないが、65歳という自分の年齢を考えても、これは政府の仕事としては難しい条件であろう。雇用できない場合、次の可能性としてボランティア、つまり給与を必要としないクリスチャンのソーシャル・ワーカーとして雇ってもらえないか。その場合、自分の所属する宣教師のボードに経済的支援を依頼する。<sup>(9)</sup>

以上、文面からは給料がなくても是非とも働きたいと考えるほど、マンザナーでの仕事に極めて意欲的であることがうかがえる。

1944年6月22日、デフォレストはロサンゼルス発リノ行きのバスに乗ってマンザナー日系人収容所に到着した。デフォレストは希望通り、マンザナー収容所の「家族カウンセリング・プログラム」のスタッフとして任命された。デフォレストが着任したとき、マンザナーに収容されている日系人は既に当初の1万人から6千人に減少していた。「軍事地域」の外に再定住する者、ツール・レークに収容者が移動することによって減ったのである。

デフォレストの直属の上司は先述のコミュニティ福祉部部長のデイル夫人(Mrs. D'Ille)だった。1919年に東京を離れると、彼女は赤十字とともにシベリアに渡り、フランス領事館のデイル氏と結婚し、アメリカに帰国したが1937年に夫を亡くした。それ以来彼女はソーシャル・ワークの仕事に戻り、日系人の強制退去を助け、マンザナーでは非常に有能な働き手となっていた。

デフォレストの仕事は残っている日系人を順次面接し、それぞれの人生の中で本質的に重要な点をメモし、どのような再定住がよいかを考え、また収容者に入手可能な社会的、経済的、法的な援助を伝えることであった。たとえば自分の不動産がどうなったかわからない家族に対してWRA(War Relocation Authority戦時転住局)が喜んで調査を手助けする、息子が従軍している家庭では経済的に困窮する両親は政府に手当てを申請することができるなどといったことを伝えることができるのはデフォレストにとって嬉しいことであった。<sup>(10)</sup>

デフォレストが着任した時点でマンザナー収容所は開設以来、2年2ヶ月経過していた。すでに再定住政策が推進されており、心身ともに健康で働き盛りの17歳から35歳の日系人は収容所の外に出て、「軍事地域」以外の全米各地、すなわち中西部や東部に再定住していた。したがって収容所内に残されていた日系人は高齢者や子供と何らかの意味で問題を抱えているものの三種類に大別された。1944年8月の時点のマンザナーにおける再定住のペースは1ヶ月に平均100名ほどの一時的季節労働者と、35名ほどの軍隊志願者であった。

デフォレストが着任してみると、アメリカ人スタッフの中に戦前の滞日経験のある宣教師など、自分と似たような境遇の人間が多かった。また日系人収容者の中に、神戸女学院の姉妹校である松山女学校や山陽女学校の卒業生や神戸女学院の卒業生の友達という馴染みのあ

る人たちがいたのも嬉しいことであった。1944年7月、着任後友人宛に書いた第一報によれば、着任時に出会った滞日経験のあるアメリカ人スタッフは先述のデイル夫人の他、熊本県にいたマリオン・ポッツ (Marion Potts)、明治学院のオルトマン夫人 (Mrs. Oltmans) (以上二人が学校の教師)、三重県のボヴェンカーク氏 (Mr. Bovenkerk)、韓国の日本人のために働いていたカトリックのスタインバック神父 (Father Steinbach) (以上二人は宣教師) の四名だった。<sup>(11)</sup>

それでは、なぜデフォレストはマンザナーの仕事に惹かれたのであろうか。  
着任後5週間ほどたった1944年8月、デフォレストは次のように記している。

ここに来て幸せです。友人が手紙に書いてくれたようにまさに「達成感、充実感」です。  
私がこれまで長年にわたって準備してきたことを達成したという充実感です。<sup>(12)</sup>

さらにデフォレストはマンザナー収容所の経験は自分のそれまでの枠を破り、新しい知の地平を提供してくれる「解放的な」(liberating) 経験だったと述べる。

## 2. 日系人強制収容に対するキリスト教宗教団体による反対運動

真珠湾攻撃によって日に日に高まる反日感情を背景に、フランクリン・D・ローズヴェルト大統領は、ヒステリックな世論に押されて、大統領令第9066号を1942年2月19日に発令した。これが法的根拠となって「軍事地域」に指定された西海岸一帯からおよそ11万2千人の日系人住民が強制退去させられ、集団疎開させられた。いわゆる日系人強制収容である。<sup>(13)</sup> 政府側の表向きの大義名分は悪化する反日感情の下、政府として日系人の身の安全を図ることとされた。しかしこの措置はアメリカ市民権を有する日系二世の基本的な人権を侵害するものとして、その実施に当初から疑問を持つ人々がいた。

翌月の1942年3月18日大統領令によりWRAが収容所を管理する文民機関として創設された。その責任者として任命されたミルトン・S・アイゼンハワーもその後継者ディロン・S・マイヤーも、自分たちを人道主義者と考え、強制収容が孕む問題点に気づいていた。しかし、ロジャー・ダニエルズ (Roger Daniels) によれば単に「親切な管理者」になることで事を収めようとしていた。<sup>(14)</sup>

アイゼンハワーは次のような書簡を書いている。「戦争が終了し、12万人という前例のない転住を冷静に考えると、今まで行われてきた可能性のある不正義やそれを回避できなかったことを、アメリカ人として我々は後悔することになろう。」<sup>(15)</sup> アイゼンハワーは以前ニューディールを支持した農務省の学究的な官吏であり、のち大統領となったドワイト・アイゼンハワーの実兄にあたる。アイゼンハワーが初代WRA局長に就任したこととの関係は不明だが、WRAには他にも農務省関係のニューディーラーたちが多かった。

デフォレストが着任したマンザナー収容所のメリット所長(Ralph Merritt)は第一次世界大戦中カリフォルニア州の連邦農業行政官を務め、農業と鋼業を手広く扱うビジネスマンでサンメイド(Sunmaid)という大手レーズン会社の社長を務めたこともあった。<sup>(16)</sup>

日系人強制収容のひとつの特徴は、強制退去と収容の実施とほぼ同時に再定住、つまり大学生など一部の日系人を収容所の外に出して定住させる運動が進んだことである。日系人学生の「軍事地域」の外の大学への再定住運動の担い手となったのは、カリフォルニア州立大学やワシントン州立大学など日系人学生の多かった大学のYMCAやYWCAなどキリスト教団体や教会関係の宗教団体だった。さらに、その草の根の運動に触発されて全国レベルの組織化を図ったカリフォルニアや中西部の大学の学長ら教育者たちであった。

日系人学生の大学への再定住を研究したオースティン(Allan W. Austin)によれば、カリフォルニア州立大学バークレー校のポール・テイラー(Paul S. Taylor)教授が連邦政府宛に書いた学生再定住プログラムの手紙(1942年3月17日付)が最初の提案という。<sup>(17)</sup> カリフォルニア大学学長スプロウル(President Robert Gordon Sproul)らの呼びかけに応じて中西部の大学学長たちも議論に加わり、1942年3月21日、YMCAとYWCA主催の会議がバークレーで開かれ、学生の再定住を調整する委員会として学生再定住委員会(Student Relocation Council)が結成された。地域ごとに受け皿としてさまざまな教派のキリスト教宗教団体があたり、現場の窓口となった。アイゼンハワーが依頼したことにより、クエーカーのキリスト教団体、AFSC(American Friends Service Committee、アメリカ・フレンド・サービス委員会)は学生再定住にもっとも貢献することになった。

日系人強制収容が決定され、実施に移されると、ほぼ同時に、その害を正そうとする教会やYMCA、YWCAを中心とする草の根のキリスト教団体のネットワーク作りが行われたのは注目に値する。このことによってデフォレストのように戦前日本にいた宣教師のうちの多くのものが、戦争勃発とともに帰国を余儀なくされたとき、いち早く日系人強制収容の情報を入手し、仕事に就くことが可能になった。ネットワークによって情報収集と人材の手配のスピードは一段と速くなった。アメリカン・ボードが1944年に行った調査によれば、日本から帰国した宣教師287名(男性114名、女性173名)のうち、日系人収容所関係の仕事に就いたものは40名(男性10名、女性30名)に上る。<sup>(18)</sup> また、帰国した宣教師たちは、このネットワークのおかげで、日系人強制収容を巡る基本的な人権侵害および違憲の問題やこれについての訴訟や論争の情報を十分入手できた。

キリスト教宗教団体が行った、日系人強制収容に対する反対運動には、このような学生の再定住運動のほか、日系人収容の行為自体に抗議する文書、広報活動もあった。この方面で活発だったのは、日系人収容に抗議する複数の団体の長を務めていたゲーレン・フィッシャー(Galen M. Fisher)だった。フィッシャーもまた、YMCAの国際委員会の長として戦前の日本に21年間滞在経験がある人物だった。帰米後は「アメリカの原則とフェアプレー委員会」(Committee on American Principles and Fair Play)と「プロテスタント教会日本サービス委員

会」(Protestant Church Commission for Japanese Service)を設立し、創立者兼理事として、日系人の強制退去のすべての段階に監視の目を光らせていた。

フィッシャーは1943年8月から9月にかけて雑誌*The Christian Century*に日系人収容の人種差別の不正を告発する文書を連載した。

「真珠湾で日系人が妨害した」

「情報官に二世は情報を提供しなかった」

「日系人と日本の兵士は心の中で兄弟である」

「収容者を隔離することは合法で必要なことである」

「収容者は不変で人格のない存在である」

といった日系人について流布していた7つの偽りを列挙してこれに反論を加えた。また大統領の最大の過ちは軍事的必要性和大衆の恐怖心を混同してしまったことにあるとし、日系人収容が実施されるに至った背景には一人の人物、西部防衛司令部の長官デウィット将軍(John L. DeWitt)の人種差別主義が作用したとも指摘した。また大衆の恐怖心を煽った新聞の責任をとりあげ、特にハースト社系列の新聞各社と「デンバーポスト」紙(*Denver Post*)を批判した。

一方、フィッシャーは日系人収容に対してキリスト教宗教団体が行ってきた抗議運動の報告も行った。まず教会とYMCA, YWCAは州レベル、そして全国レベルで会議を開き、日系人強制収容がフェアプレーに反し、民主主義を損なうものであるとし、蒋介石夫人の言葉の通り「非アメリカ的、非民主的、非クリスチャン」(un-American, undemocratic, unchristian)であるとしてこれを告発する決議を行った。

また、「プロテスタント教会日本サービス委員会」を通して、教会は率先して収容所内の宗教活動を支援し、日系人の「再定住」のために尽力した。フィッシャーは日本から戻ってきた宣教師がこの仕事のために多数貢献していることを指摘する。個々の学生が「再定住」し大学に通えるための奨学金を提供する。あるいは収容者が仕事を探すときの宿泊施設として収容所の外にホテルを提供する。こうしたさまざまな支援活動を行ったのも多数の教会グループであった。

さらに、「日系人再定住の委員会」(Committee on Resettlement of Japanese-Americans)はフィッシャーの報告によれば、アメリカで最も大きい超教派の三つの団体、教会と国内伝道と海外伝道それぞれの北米大陸レベルの団体が共同でスポンサーとなって結成したものだ。<sup>(19)</sup> またメソジスト、バプテスト、クエーカー、カトリック、長老派など教派別の宗教団体も「再定住」を個別に支援した。その上、西海岸の大学学長たち、スプラウル・カリフォルニア州立大学学長、元内務大臣兼スタンフォード大学総長、カリフォルニア工科大学やミルズ・カレッジの学長も引き続き再定住を支援していた。<sup>(20)</sup>

教派別支援活動のひとつとして、デフォレストが所属する会衆派教会も日系人収容者のために特別な委員会を結成した。日系人の会衆派教会が内陸に移動するのを支援するために、1942年3月「日系人収容者を支援する会衆派クリスチャン委員会」(The Congregational Christian Committee for Work with Japanese Evacuees)が結成された。西部諸州の政府高官とホートン博士(Dr. Douglas Horton)の要請に応じて、戦争委員会(Commission for War Services)が旅費を負担し、アメリカン・ボードからは日本から帰国したばかりのジレット(Dr. Clarence Gillett)が人材として貸与された。

1942年6月にダラム(Durham)で開かれた総会でその目的は次のように決議された。

会員と牧師は自分たちのコミュニティに日系人、特にアメリカ市民権を持つ日系人が解放されたときにこれを受け入れる好意的な空気を創るよう努力する。その結果、日系人が全米に分散し、食料その他の生産に自由に参加して国家に有用な存在となるようこれを支える。

彼らの目的には収容所内の宗教活動の支援も含まれていたが、次第にその主たる目的は再定住の問題と分散した再定住に好意的な「受け入れと親しみやすさ」の空気を大衆の間に創ることに移っていった。<sup>(21)</sup>

デフォレストも先述の通り、ダラムで1942年6月に開かれたこの総会に出席した。神戸女学院の自分の前の院長だったソール(Susan A. Searle)宛に1942年6月25日付の手紙で、四日間会議に参加しておおよその感触を得られたこと、自分が最も興味を持ったのは人種の部分だったこと、唯一の日系人のトーマス夫人(フジ・ヤマナカ)も発表者であったことを報告した。会議に出席して、デフォレストは教会の新たな役割について次のような示唆を得た。

日本人(日系人)<sup>(22)</sup>のために教会が行う努力は、(日系人を)それぞれに適した仕事と地域に再定住させる部門である。もし的確な(日系人の)分散を実施できれば、国にとってもまた個人にとっても大きな祝福となるだろう。この分野はクラレンス・ジレットの主たる仕事となるだろう。<sup>(23)</sup>

このように日系人強制収容の問題には、大統領令9066号が発令された直後から、キリスト教の宗教団体が超教派、教派別、規模の大小を問わず積極的に関与し、広報活動とネットワーク作りを進めて、抗議運動と再定住を支援する運動を展開していった。しかもその中心となっていた人物には戦前キリスト教伝道のために日本に長期にわたって滞在した宣教師やYMCA、YWCA関係者が多かった。こうした環境の中、健康を回復したデフォレストが積極的にマンザナー収容所での仕事を志願したのは極めて自然な成り行きだったと言える。



### 3. マンザナー日系人収容所とデフォレスト

ここでは、デフォレストの「マンザナー日記抄録」の中から、マンザナーの生活、強制収容の違憲性、黒人スタッフと人種問題、戦争終結への働きかけに関わる部分を、時系列に沿って抜粋し、デフォレストの思想を概観する。

#### マンザナーの生活

「マンザナー」はスペイン語で「林檎園」を意味する。1930年にロサンゼルス市がその土地と水資源の権利を購入したとき、りんごと梨の木が茂っていたためにこの名前が付けられた。しかしその後ロサンゼルスに水を供給したためにマンザナーの水資源は枯渇してしまい、収容所を建設したときには砂漠地帯となっていた。デフォレストが着任したとき、収容所が建設されてから既に2年2ヶ月経過していたが、デフォレストは管理の行き届いた見事な「町」になっていることに感心した。日系人の努力により砂漠には見事な野菜畑や芝生と花や石の庭園が作られていた。日系人の強制収容はまず仮収容所に集められてから10箇所の強制収容所に移るプロセスを踏むものだったが、マンザナーのみ、仮収容所がそのまま収容所に昇格した。デフォレスト自身の描写によれば、彼女の着任時、マンザナーはロスからリノ行きのバス路線で最大の町に成長していたという。マンザナーには「子供の村」という孤児院や実験的なゴム畑と実験室、250台のベッドを保有する病院、そして幼稚園から高校までの最新の学校教育システムがあった。マンザナー強制収容所のメリット所長(Merritt)は、マンザナーの町について次のように述べた。

マンザナーは戦時中の非常時に一時的に作られた人工的な町で戦争終結とともに消滅するものだが、「人々は平和に善意をもって」生活していたこと、そして他のカリフォルニアの学校に匹敵する水準の学校では、「アメリカの理想の市民権」と「アメリカ的生活様式」を学んだと記憶してほしい。<sup>(24)</sup>

実際に着任したデフォレストにとって、この気候風土と他の仲間との出会いによって生活面で彼女の常識と習慣を覆すような出来事があった。まず灼熱の夏と砂漠の強い砂風によって、デフォレストは毎日ストッキングをはくことを断念し、初めてソックスをはくようになった。また髪の毛をどうしてもまとめられないので、ついにパーマをかける決意をする。収容所内でパーマをかけることになったので、外部のような美容院はなく、やむを得ず美容学校に出かけ、多くの生徒が観察する中、生まれて初めてのパーマをかけた。デフォレストはこの二点の外見上の変化についてはあまり強い抵抗もなく、自然に受け入れたが、どうしても受け入れられなかったのが、同僚で集まるときに飲むアルコールとタバコであった。女性が喫煙と飲酒をすることにデフォレストは目を丸くして驚く。かつてともに日本で働いたデイルズ夫人も自宅に招くときに、アルコールを出し、本人も飲むことにデフォレストは仰天

する。デフォレストは日本で宣教師の子供として生まれ、育った人物であるだけに、おそらく本国アメリカでは当時珍しいほど純粋なピューリタンの禁酒禁煙の生活を当然と考えていたのであろう。

このように生活面では完全には順応できないデフォレストであったが、ジュニア・カウンセラーとしての仕事にはほどなく順応し、1ヶ月ほどたった1944年8月1日付の抄録では、仕事を楽しみ、マンザナーに來た喜びを語る。仕事の内容は基本的に次のような手順で行われた。

仕事はとても面白い。大抵私は一日に二つのインタビューをこなす。インタビューが終わると、要旨を書き上げ、そのインタビューについて二枚の印刷物に記入し、のちにタイピストが清書したコピーを確認する。それから普通ではないケースについてどこに紹介するか、どのように処置するかを相談する。<sup>(25)</sup>

この基本的なインタビューの仕事に加えて、デフォレストの教師としての経験を生かすチャンスが二つ与えられた。一つは収容所の教育係が収容所内に計画する日本語の新しいクラスを実施に移すものであり、もう一つはスタンフォード大学で語学教師として二世を雇ってもらう約束を確保したのでこれを具体化するというものだった。

### 強制収容の違憲性の認識

日系人強制収容の合憲性の問題で一番問題となったのは、アメリカ市民権を持つ日系二世を合法的な裁判の手続きもなく、強制退去・収容したことが、基本的人権を侵害し、違憲ではないかという問題だった。違憲の可能性があるにもかかわらず、これは戦争緊急時に発令された大統領令によって「合法的」に実施された。デフォレストは、強制収容そのものが基本的人権を侵害するもので、違憲であることを最初から十分認識していた。デフォレストがこの仕事を通して追求した目標はこういう事実を改善するために、「他の人が日本人を愛するようになるように手助けすること」であった。しかし、その実現が難しいこと、無骨にその考えを露わにするのはかえって逆効果であって、むしろ「間接的な態度」(indirection)に徹するほうがよいことをデフォレストは痛感していた。しかしながら自分は性格的に「敢然と難局にあたる」(take the bull by the horns)傾向があって、「間接的に仕向ける」ことは苦手なことも自覚していた。<sup>(26)</sup> そのため明らかな人権侵害には毅然と憤り、たとえば日本人の天皇観や宗教観など理解が難しい概念が入る場合には通訳するときに工夫をし、機会をみつけて米軍側に説明するといった行動をとった。デフォレストの態度、信念自体が相手の気持ちを変える場合もあった。

この点についてデフォレストは1944年8月9日付のマンザナー日記抄録の中で、「たとえ最初は軍事上の必要性があって強制退去が実施されたにせよ、2年間以上、何の告訴もされて

いない多くのアメリカ市民を監禁し続ける理由は憲法上も緊急時も全く考えられない」と弾劾する。さらに、この事実と政府が再定住計画を積極的に推進している関係を次のように述べた。

すでに三人の二世の試験的訴訟について法廷で合憲か争われており、この先、連邦裁判所、最高裁に提訴される。そのときボンスティール将軍(Bonesteel)とその他の担当軍人は原告をカリフォルニアの家に戻さない根拠をどのように示すつもりなのか、いずれにしる政府はその弱点を理解しているからこそ、これ以上収容所に置いておくことはできないと考えている。特にWRAが再定住計画を推進している理由はここにある。<sup>(27)</sup>

この抄録が書かれる三日前の日曜日、マンザナーではイタリア戦線で戦死した少年の告別式が行われた。マンザナー収容所出身者として初めての戦死者だった。デフォレストはこの告別式でメリット所長が弔辞の中で述べた痛烈な批判に感激する。メリット所長は次のように述べた。

この死は前線のみならず、アメリカ国内の自由への挑戦である。祖国のために命を捧げた少年の両親を有刺鉄線の中に監禁し、市民権を否定することがどのように正当化できるというのか。アメリカ自身が自由、正義、平等についての自らの信念を見直す挑戦である。<sup>(28)</sup>

デフォレストはメリット所長が自分の首をかけてこのような弔事を述べたのかと息を呑みながらその勇気に感銘を受けた。告別式の締めくくりとしてアベ牧師がリンカーンのゲティスバーグの演説の最後の部分を引用すると、デフォレストは「リンカーンはどのように思っただろうか。でも過去もっと奇妙な状況でも引用されたことがあっただろう」と呆れ返って記した。

また、強制収容の違憲性の問題と同様に、もうひとつ、軍隊による「忠誠の宣誓」(Loyalty Oath)によって、アメリカ市民権を持つ日系二世に合法的な裁判の手続きをしないまま「国外退去」を命じ、市民権を剥奪することも行われていた。この核心部分にデフォレストは切り込む。

1945年3月20日付抄録に次のようにある。

私は「何の権威でもって軍隊はアメリカ市民(下線原文ママ)を法的裁判もなしに退去させるのですか」と尋ねた。WRAのD.S.マイヤー(Myers)局長は、既に出されている大統領令によるものだが、自分もメリット所長と同様、この退去令には賛成できないし、その考えを既にプラット(Pratt)将軍に伝えてあると答えた。これから司法省がアメリカ

市民の事例を検討するという。(雑誌*Pacific Citizen*によれば、アメリカ市民的自由連盟(American Civil Liberties Union)は既にロサンゼルス法廷に出された3件の試験訴訟を支援している。)2月15日付のスタッフ会議でマイヤー所長はマンザナーでの退去問題の現状を報告した。それによると51名の収容者がマンザナーで軍隊による審問を受け、261名のうち159名はFBIの調査と収容所での記録に基づいてWRAから国外退去を解除され、39名は隔離のみに推薦されている。他400名は家族としてこうした事例につながっている。トゥールレーク強制収容所ではアメリカ市民権を放棄する現象が流行して5000人の若者がその手段をとった。生活し働くには過酷な雰囲気には違いない。<sup>(29)</sup>

1945年3月23日付抄録では、ついにデフォレストが軍隊の審問に通訳として立ち会う場面が紹介される。

昨日と今日、私は通常業務から解放されて、8名から10名の軍人が並ぶ前で二人の退去候補者の軍隊の審問を通訳する仕事を行った。昨日の男性は事実上ほとんど英語を理解できなかったもので、すべてを通訳しなければならなかった。「宣誓」(oath)と「確約」(affirmation)の違いすら通訳しなければならず、その違いを私自身説明できるほど理解できていなかったのが大変だった。こうした審問が極秘扱いでなければ質問と答えを一部メモできるのだが、いくつかの表現は日本語にするのが非常に難しかった。天皇の神性と国のために戦死した兵士(英霊)を神社に祀る問題については、質問者が持っている意味合いを反映した語彙を使おうとしたが、今振り返ってみると、結果的に日本語ではその質問がばかげているように聞こえ、たちまち(退去候補者に)否定されたのだった。私自身の言葉の選択は一部しか意図的ではなかったが、振り返ってみるとかなり良かったように思う。一度や二度、質問を日本語にする難しさからためらって口ごもったが、その結果、(質問者から)もっと簡単に言い直してもらうことができた。審問が終わったあと、軍人の一人が日本の思想についてさらに質問してきた。そのおかげで日本人はアメリカ人よりも日常生活の中で霊をもっと意識していること、そして死後兵士を「神格化」することについては、カトリック教会が故人を聖徒の列に加えることによく似ていると感じていると伝えることができた。すると軍人の一人は次のように答えた。「そうなる問題がずいぶん違って見える。」<sup>(30)</sup>

翌日の軍隊の審問の通訳は退去候補者自身、英語をかなり理解でき、わからないときに数回デフォレストの援助を求めただけだったので、デフォレストにとっては負担にならなかった。審問終了後、再び軍人とおしゃべりする機会があり、軍人の一人から来栖(大使)がワシントンで最後の交渉を行っていたときに日本軍の計画を知っていたかと思われ尋ねられた。これには当時「並外れた宣教師」と呼ばれ、インドのガンジーを始めとして世界中に影響力

を持ち、キリスト教の「土着化」(indigenization)を図ったといわれるメソジストの宣教師スタンリー・ジョーンズ(Stanley Jones)のように答えたデフォレストは煙にまく。しかしさらに友人から聞いた次のエピソードをその軍人に伝えたと、軍人はかなり感動していたという。

空軍にいた自分の息子が戦死すると来栖は「自分が祖国の戦争回避に失敗したことについてようやく祖国に償いをした」と述べたと放送された。<sup>(31)</sup>

1945年3月にデフォレストも立ち会うほど、軍隊による審問が増えた背景には、前年1944年12月18日の最高裁判所による判決とそれに先立って、国防省によって、不忠誠のかどで告発されていない二世に対しては、西海岸を禁止区域とする禁止令が解除されたことがあった。<sup>(32)</sup> 12月18日の最高裁判所による判決は、四件の日系人による訴訟に関連して出されたものであったが、1942年春に西海岸より日系人をすべて強制退去させたことを合憲とするものであった。しかしこの判決には三人の最高裁判事が人種差別を違憲とする立場から異議を唱えた。最高裁ではこれに関連して忠誠心のある日系人を本人の意思に反して強制収容所に監禁してはならないという判決を全会一致で出した。この判決と西海岸を禁止区域とする禁止令が解除されたことにより、WRAは収容者の「不忠誠」を証明できない限り、日系人を収容所に収容し続けることはできなくなり、再定住をもっと急がなければならなくなったのである。

こうした中、デフォレストは個別に聞き取り調査を進め、市民権を放棄して国外退去を望む候補の中には本当に日本へ行くことを希望しているわけではなく、家族離散を避ける目的のために便宜的に市民権放棄を検討するものが多いことに気づいた。個別事例の中で、聖書を読んで自立して将来を考えることを促すことによって、市民権放棄ではなく再定住へと方向転換するものも現れた。<sup>(33)</sup>

1945年7月になると、デフォレストが通訳を行った軍隊の審問で無事国外退去が解除され、米国本土に再定住が許可される事例も出てきた。そのうちの一人、仏教僧侶であった永富信常は審問を受けた翌日(1945年5月23日)デフォレストに礼状を出し、さらに国外退去解除の通知を受け取ると再びデフォレストに丁寧に手紙(1945年7月2日)で報告した。竹中正夫によれば、この人物はその後1958年全米の仏教協議会の事務総長に就任し、長男政俊は龍谷大学、京都大学、ハーバード大学で学んだ後、ハーバード大学神学部教授として仏教学を講じ、キリスト教と仏教の対話に尽力したという。竹中が指摘するとおり、これは戦時下の仏教徒とキリスト教徒の交流の一つであるが、デフォレストは先述のスタンリー・ジョーンズを尊敬していたように、カトリック、ロシア正教会、神道、仏教や日本の土着信仰などにも寛容であった。<sup>(34)</sup>

1945年7月の抄録にはメリット所長が高く評価した別の人物の国外退去解除の事例も報告

されている。やはりデフォレストが軍隊の審問で手紙の翻訳に関わった事例である。この人物は戦前日本で教育を受け、1939年もしくは1940年にアメリカに戻り、志願してアメリカ陸軍に入ったものだった。こうした経歴を持つものは陸軍が最も疑いをかける対象であり、しかも同様の経歴の持ち主の中で、国外退去が解除された第一号であったために、メリット所長は重要な事例だと高く評価した。

同年7月25日の抄録にはカリフォルニアのウォルナット・グローブに日系人のマツオカー家が戻ってきた場合にはその家に放火すると脅した女性にカリフォルニアの法廷で禁固刑の有罪判決が出たニュース(雑誌*Pacific Citizen*掲載)が紹介されている。デフォレストはそれまでの判決に比べて画期的に厳しい判決が出たことに仲間とともに大喜びしたと記した。

以上概観したように、戦争の勝利が見えてきた1944年12月以降、法廷で日系人の強制収容を続行する合憲性が疑われるようになると、西海岸に居住する禁止令も撤廃され、政府は再定住もしくは隔離・国外退去を急ピッチで進めて、強制収容所閉鎖のための作業を急いだ。その過程でさまざまな書類を準備して再定住を個別に進めていく中、デフォレストは間に入って、日系人収容者のために有利になるように言語や文化を翻訳し、手配を進めた。ここでは市民権と合衆国憲法に違反する部分に注目して概観したが、デフォレストは間違っていることには断固として抵抗し、正義と信仰を貫いたことが明らかになった。限られた紙面のために詳細は稿を改めて論じるが、メリット所長やデイル夫人など、デフォレストはマンザナー収容所の現場のスタッフが収容者の人権を守ろうと、臨機応変に柔軟に対応していたことにも希望を見出していた。

## 黒人スタッフと人種問題

1945年6月7日付の抄録では、ジュニア・カウンセラーとして黒人女性とその前の晩に到着したことにマンザナー収容所のスタッフが一様に驚いている様子が紹介される。連邦政府の応募書類には人種を記載する欄は禁止されている模様で、そのため上層部を含め、誰も黒人が応募していることには気づいていなかった。応募書類には優秀で素晴らしい適性が示されていた。彼女が黒人と知って、デフォレストを含め、全員が非常に驚いた様子であったが、一部のスタッフ(おそらく南部出身の人間とデフォレストは述べる)に自分たちの寮には入れたくないという抵抗する人間があつて、結局、彼自身南部出身である副部長のひとりが本人に「不穏な空気があるかもしれないが、どうか気落ちしないでほしい」と伝え、彼女は寮ではなく、白人のスタッフ一名とアパートに住むことになった。一緒に住むことを申し出た白人スタッフはそれまでデフォレストの隣に住む女性だった。デフォレストはマンザナーにそのような人種差別の感情があることを残念だと記し、肌の色によって日系人収容者が人種差別を受けることがないようにと結ぶ。他の収容所には既に黒人スタッフが派遣されていたようだが、マンザナーではこのときが初めてであった。デフォレストはマンザナーにもリベラルな人間が十分いるので彼女は良いコネクションを作ることができるだろうと述べた。<sup>(35)</sup>

この黒人スタッフと人種問題については、続けて7月20日付の書簡でも触れている。デフォレストの母校であるスミス・カレッジにも黒人教員が誕生したことを歓迎し、マンザナーでのその後の展開を紹介する。マンザナーでは南部出身者達が自分たちの寮に黒人女性が入ることを執拗に拒絶したので、デフォレストは初めてその態度に対抗する態度をとった。たまたまこの黒人女性は、最初に自分の部屋の向かいに連れてこられたので、彼女がほっと安心できるよう親切にすると、その態度が他の人たちにも伝播し、多くの人間が彼女に親しみやすい態度をとった。そしてかえって自分や、その黒人女性と一緒にアパートに住むことを申し出た白人女性のように彼女に手を差し伸べた人間のほうが、人の気持ちを温かくし、多くの人が集まってきて友人が沢山できたという。その上、マンザナーのスタッフにはユダヤ人も多く、デフォレストはその事実にも非常に興味を持つ。最後にこの経験をまとめて、次のように結んだ。「ここで私がどんなにリベラルな教育を受けているか、本当のアメリカニズム(real Americanism)にさらされていることがおわかりになるでしょう。」<sup>(36)</sup>

1945年という歴史的な文脈からみると、南部では公民権運動が始まるおよそ10年前にあたり、1896年の「プレッシー対ファーガソン」判決で確立された「分離すれども平等」という人種隔離政策が容認され、公然と人種差別やリンチ事件などが行われている時代にあたる。地理的にも地方によって黒人や日系人などの人種別の住み分けもはっきりしていた。従って一種の人種差別の結果として人工的に作り出されたマンザナー日系人収容所において、その人種構成がこの黒人女性の登場までは、収容者である日系人とスタッフである白人だけという偏ったものであり、黒人を入れることが新たな火種となったことは歴史の皮肉でもあり、当時のアメリカの人種問題の複雑さを露呈する。同時に大半の人生を日本で過ごした宣教師のデフォレストにとって、マンザナー収容所における黒人やユダヤ人といった人種との混雑が初めての経験だったということは、来日宣教師もまた特殊な人種環境にあったことを示す。

### 戦争終結への働きかけ

最後に「マンザナー日記抄録」の中から、戦争終結への働きかけと原爆投下後の記述を概観する。

終戦の一ヶ月前、複数のキリスト教の宗教団体が対日戦争の終結を早める運動を起こした。戦争短縮のための策を講じてほしいと大統領には複数の請願書が提出された。その中には元日本での宣教師だったアプトン(Upton)からのものもあり、また雑誌*Christian Century*の6月27日号に掲載された牧師や教育者60名によるマニフェストに応じた請願書もあった。マニフェストは今こそ人を虐殺し抹消する爆弾投下をやめさせるために何か行動をとる時期だと呼びかけた。*Christian Century*はアメリカが、強調しながらもその内容や利点を日本側に伝えなかった無条件降伏について、それを受け入れたらその後どうなるかを大統領が日本に宣言してほしいと述べた。つまり国連に加盟し、大西洋憲章を保証し、自由な政府をつくるチャ

ンスになるという宣言である。無条件降伏には他に厳しい要素もあった。カイロ宣言が求めたことと戦争犯罪者の引き渡しだった。この請願をメリット所長に見せるとメリット所長は「血なまぐさい」と驚いたが、デフォレストは前向きで建設的な議論と判断してこれに署名した。<sup>(37)</sup>

こうしたキリスト教宗教団体による努力もむなしく、8月6日と9日、ヒロシマとナガサキに原爆が投下され、デフォレストは「想像を絶する恐怖」と記す。その直後にソ連参戦のニュースを聞き、デフォレストは領土拡張を求めているソ連が参戦すると、戦争の目的が変わってしまうと危惧した。やがて日本が降伏したニュースを聞くと、自室に戻り、ひざまずいて祈った。<sup>(38)</sup>

その後、マンザナー日記抄録には、デフォレスト自身の市民意識(citizenship)が次のエピソードの中で示された。

あるとき夕食をともにした大学関係の男性二人に、アメリカ政府の関係者が、神戸女学院の写真を軍事目的のためにほしがっていたので、自分の手元にあった写真を渡すと友人に「どうしてそんなことができるの」と言われた話をした。ところが(彼らは)その意味がわからない様子だったので、友人は写真を渡すというその行為が日本の友人に対する裏切り行為と感じたのだろうとデフォレストは説明した。すると聞いていた男性の一人が「でもあなたはまずアメリカ人でしょ」と質問した。今度はデフォレスト自身が何を言われているのかよくわからなかった。デフォレストが躊躇している様子はさらに彼を混乱させた。デフォレストは「私はまずクリスチャンです」と説明した。そのあと沈黙が走り、みな次に何を話したらよいか、言葉を捜している様子だった。<sup>(39)</sup>

この会話のおかげでデフォレストは「宗教によって人間は国家を超越できる(super-national)」ことを発見した。アシスタント・カウンセラーの一人が、新聞やラジオで「神の恩寵のおかげで原爆が投下されたのは自分たち(アメリカ)にはではなかった」と報道されているのに反論して「宗教を持ちこむべきではない」と言っていたのに対し、デフォレストは「アメリカによる抹殺型爆弾投下や原爆投下とナチスの破壊には何の違いもない、アメリカには復讐心が若干少ないかもしれないがほとんど違いはない」と言う。デフォレストにとって神に祈る「勝利」はどちらか一方が戦争で勝つことを祈るのではなく、「神の王国」の勝利を祈ることを意味した。さらに続けてデフォレストは神の勝利を考えたときに、「他の国の人を無数殺すことによってアメリカ人の兵士の命を救うことは議論になるか」と反論する。<sup>(40)</sup>

8月17日付のマンザナー日記抄録には日本がポツダム宣言を受諾し、全面降伏し、天皇による玉音放送のあと、マンザナー収容所にはこれまでになかった世代間の亀裂が走っていることが報告された。戦争が終結するまでは一世と二世の間ではアメリカ市民権を持つ二世の方が優位に立っていたが、戦争が終わると、ごく一部の一世が感情的になって敗戦の原因は



二世が一世の祖国を攻撃してアメリカ側に立って戦ったせいであると述べた。このためマンザナー収容所には非常に重苦しい空気がたちこめていたのである。

デフォレストは「祈りの会」を提案し、ディル夫人が直ちに賛同し、ディル夫人の家で「祈りの会」を開いた。さらにディル夫人はメリット所長に収容所にいる日系人の宗教指導者と会って話し合う機会をつくってもらい、宗教指導者たちの指導のもとで日系人がこの苦しみを健康的に語り、祈る場を設けることを企画した。ディル夫人は日本人には正面から事実と向き合わずに、自らをごまかして本当の道や出来事のもつ意味を見失ってしまう、古くからの伝統があると考えていた。人間は正面から向き合わない限り、人生の経験から教訓を得ることはできないので、ディル夫人は仏教の僧侶とキリスト教の牧師が何とか彼らが真理を見出せるよう手助けできるのではないかと期待していた。このようにデフォレストのみならず、日本YWCAのために戦前に日本伝道に関わっていたディル夫人も日系人の社会の中で、きわめて自然に仏教とキリスト教の連携を考えていたことが伺える。

## おわりに

半世紀以上の滞日体験のあるアメリカ人宣教師にとって、二つの祖国が戦火にあるときにマンザナー日系人収容所で働くことはどのような意味を持ったのか。こうした素朴な疑問から本稿の問題意識は始まった。デフォレストが書き残した「マンザナー日記抄録」と関連する書簡、報告書、そしてアメリカン・ボード本部に保管されていた多数のキリスト教団体と日系人収容所関係の資料を渉猟するうちに、来日宣教師と日系人収容所との接点は偶然の産物ではなく、むしろ複雑に絡み合った複数のネットワークでしっかりとつながっている関係であることが明らかになった。

また、マンザナー収容所におけるデフォレストの活動を通して、デフォレスト自身、単に日本文化の深き理解者であったばかりではなく、その「市民」意識(citizenship)はアメリカ人でもなく、日本人でもなく、国籍を超えた、「超国家」(supernational)のクリスチャンであることが浮かび上がってきた。「宗教は国家を超越する」というデフォレストの真理にこそ、デフォレストの宗教的寛容性を説明するヒントが隠されているのかもしれない。この点については今後の研究課題としたい。

## 註

- (1) デフォレストが以下の文章の冒頭に引用するテニソンの詩。Charlotte B. DeForest(以下CBDと略す), "Some Notes on the Attitude of the Japanese People Toward Their Emperor," Sophia Smith Collection, Smith College Archives(以下Sophia Smith Collection).

- (2) シャーロット・B・デフォレスト (Charlotte B. DeForest, 1879-1973). ポストンに本拠地を置くアメリカ合衆国最古の会衆派の海外伝道局 American Board of Commissioners for Foreign Missions (以下アメリカン・ボードと略す。1810年結成) に父親の代から所属し、宣教師として1903年来日。神戸女学院には1905年着任、1915年-1939年第5代院長、名誉院長、1947年-1950年再来日。勲五等瑞宝章、勲四等瑞宝章。
- (3) Noriko K. Ishii, *American Women Missionaries at Kobe College, 1873-1909: New Dimensions in Gender* (New York & London: Routledge, 2004), p.61; アイヴィ・オレーターに選ばれることが大変な名誉であったことについては、竹中正夫『C・B・デフォレストの生涯—美と愛の探求』、創元社、2003年、39頁参照。
- (4) CBD, “Case Work at Manzanar War Relocation Center,” *Pacific Citizen* (Winter 1965): CBD, “Closing Out Manzanar: Ralph P. Merritt as I Knew Him,” *Pacific Citizen* (December 1966), CBD Papers, Smith College Archives.
- (5) Lt. Col., M.I. Harry O. Compton, District Postal Censor, United States Parcel Post Building, N.Y. to CBD, Boston, Massachusetts, March 24, 1942; CBD to Lt. Col. Harry O. Compton, United States Parcel Post Building, March 31, 1942; CBD to Lt. Col. O. Compton, U.S. Parcel Post Building, April 25, 1942; CBD to Charles R. Kummer,
- (6) CBD to Susan A. Searle, Auburndale, Mass., June 25, 1942, ABCFM Papers, Houghton Library, Harvard University. (以下 ABCFM Papers と記す)
- (7) CBD to Dr. Fairfield, Manzanar, August 1, 1944, ABCFM Papers.
- (8) Verner C. Aurell, Major, Signal Corps, War Department, Headquarters, Services of Supply, Office of the Chief Signal Officer to CBD, June 12, 1943; Daniel C. Buchanan, Office of Strategic Services, to CBD, January 29, 1944, ABCFM Papers.
- (9) CBD to Dr. M. E. Opler, Claremont, March 31, 1944, ABCFM Papers. (以下、原典が一次資料の翻訳は筆者による)
- (10) CBD to Friends, Manzanar, August 8, 1944, ABCFM Papers.
- (11) CBD to Kenwood Comrades in Claremont, Manzanar, July 8, 1944, Sophia Smith Collection.
- (12) CBD to Dr. Fairfield, Manzanar, August 1, 1944, ABCFM Papers.
- (13) 膨大なアメリカ合衆国日系人史の先行研究のうち、紙面の都合より、本稿と関連する日系人収容、学生の再定住、市民権放棄についての近年の研究で他の注で言及していないものについては以下参照(英文、邦文、発行年の新しい順に記載)。Linda Gordon and Gary Y. Okihiro, *Impounded: Dorothea Lange and the Censored Images of Japanese American Internment* (New York and London: W. W. Norton & Co., 2006); Mae M. Ngai, *Impossible Subjects: Illegal Aliens and The Making of Modern America* (Princeton and Oxford: Princeton University Press, 2004); Gary Y. Okihiro, *Storied Lives: Japanese American Students and World War II* (Seattle and London: University of Washington Press, 1999); 村川康子『境界線上の市民権—日米戦争と日系アメリカ人』御茶の水書房、2007年；アケミ・キクムラ＝ヤノ編『アメリカ大陸日系人百科事典』明石書店、2002年、飯野正子『もう一つの日米関係史』、有斐閣、2000年。
- (14) ロジャー・ダニエルズ『罪なき囚人たち—第二次大戦下の日系アメリカ人』川口博久訳、南雲堂、1997年、109-112頁。
- (15) Ibid.

- (16) 社長時代このレーズンが急に中国で売れなくなった原因は、「箱に描かれた太陽の絵から日本製だと中国人が誤解してこの商品をボイコットしたためだった」とメリット所長は到着したばかりのデフォレストに自分の体験談を気さくに語るような人物だった。CBD, “Closing Out Manzanar: Ralph P. Merritt as I Knew Him,” Sophia Smith Collection.
- (17) Alan W. Austin, *From Concentration Camp to Campus: Japanese American Students and World War II* (Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 2004), p.18.
- (18) Fellowship of Christian Missionaries, ‘Notes about Former Japan Missionaries,’ “An Occasional Newsletter for Returned Missionaries from Japan,” March 1944, ABC 85.5, ABCFM Papers. 掲載されている宣教師は会衆派に限らない。
- (19) 三つの超教派の宗教団体は以下の通り。The Federal Council of the Churches of Christ in America, the Home Missions Council of North America, the Foreign Missions Conference of North America。
- (20) Galen M. Fisher, “A Balance Sheet on Japanese Evacuation,” *The Christian Century*, (August, September, 1943); Caleb Foote, “Outcasts! The Story of America’s Treatment of Her Japanese-American Minority,” Fellowship of Reconciliation, ABCFM Papers.
- (21) “The Congregational Christian Committee for Work with Japanese Evacuees,” ABC85.5, ABCFM Papers.
- (22) 原文でJapaneseだが、実質的に「日系人」を指す。この時代の文書では、「日系人」を指す英語表現として、JapaneseとJapanese Americansが混在する。
- (23) CBD to Susan A. Searle, June 25, 1942, Auburndale, Mass., ABCFM Papers.
- (24) CBD, “The War Relocation Authority Project at Manzanar, California: Some Facts About It,” ABCFM Papers.
- (25) CBD to Dr. Fairfield, August 1, 1944, Manzanar, ABCFM Papers.
- (26) CBD, Manzanar Journal Entry, July. 4, 1945, Sophia Smith Collection.
- (27) CBD, Manzanar Journal Entry, Aug. 9, 1944, Sophia Smith Collection
- (28) CBD, Manzanar Journal Entry, Aug. 6, 1944, Sophia Smith Collection
- (29) CBD, Manzanar Journal Entry, March 20, 1945, Sophia Smith Collection.
- (30) CBD, Manzanar Journal Entry, March 23, 1945, Sophia Smith Collection.
- (31) Ibid.
- (32) “Extract from the Christian Century’s Editorial on ‘Racism in the Constitution,’ Jan.3, 1945: “A Moral Obligation to Japanese-Americans” (Editorial in the *Christian Century* of Jan.3, 1945: Item from the *Pacific Citizen* of Dec. 30, 1944); ABCFM Papers. ダニエルズ『罪なき囚人たち』、118-121、154頁。
- (33) CBD, Manzanar Journal Entry, May 12, 1945, Sophia Smith Collection.
- (34) デフォレストによるキリスト教と教育勅語の融和の試みについては拙稿「明治日本の日米文化交流とキリスト教——柳満喜子とC・B・デフォレストの場合——」平成17-19年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書『キリスト教のアメリカ化と社会文化生成についての研究』(平成20年5月)、45-46頁参照。
- (35) CBD, Manzanar Journal Entry, June 7, 1945, Sophia Smith Collection.
- (36) CBD to Robins, Manzanar, July 20, 1945, Sophia Smith Collection.
- (37) CBD, Manzanar Journal Entry, July 4, 1945, Sophia Smith Collection.
- (38) CBD, Manzanar Journal Entry, August 11, 1945, Sophia Smith Collection.
- (39) CBD, Manzanar Journal Entry, August 11, 1945, Sophia Smith Collection.
- (40) Ibid.